

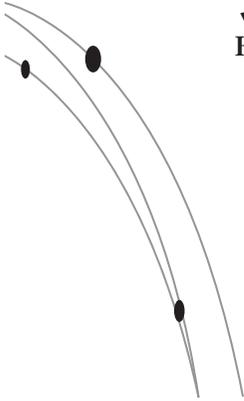
連載

フィールド・アイ Field Eye

オンタリオから——③

大阪大学 松林 哲也

Tetsuya Matsubayashi



サマーキャンプと女性政治家

オンタリオ州ロンドンには4種類の小学校 (Public School, French Immersion Public School, Catholic Public School, Independent Private School) が存在している。このうち、英語で教育を行う Public School と英語とフランス語を組み合わせる French Immersion Public School は Thames Valley District School Board が管轄していて、Catholic Public School は別の Board が管轄している (ちなみにロンドンにはテムズ川が流れており、どちらの名前もイギリスのロンドンとテムズ川を由来としている。「ロンドン」のレストランやホテルなどについて調べようとするといギリスの情報が出てくるので非常にややこしい)。Private School を含め、いずれの小学校でも9月から6月までが通学期間と定められていて、7月と8月は夏休みとなる。地域により若干の違いはあるようだが、オンタリオ州の子どもたちの多くは2カ月間の夏休みを楽しむことになる。

小学生の夏休みが保護者にとって悩みになることは日本もカナダも同じようである。保護者が仕事などで自宅にいられない場合、誰が子どもたちの面倒を見るのか、保護者が自宅にいたとしても子どもたちにどうやって「有意義な」時間を過ごさせるのか、という2種類の悩みが生じる。日本の場合、これら2つの悩みを解決してくれるのが、自治体が運営する放課後児童クラブの夏休み開設である。子どもが朝から夕方まで安全なところで宿題や読書をしたり、外で遊んでいてくれれば保護者は安心である。息子も昨年までお世話になっており、とてもありがたく感じていた。

オンタリオ州の場合、残念ながら日本の放課後児童クラブのようなサービスは存在しない。他州も同じ状況だろう。学期中は15時半に学校が終了したら、すべての子どもたちは帰宅する。夏休み中も各小学校で子どもたちを預かってくれるようなプログラムが運営されることはないで、場合によっては朝から晩まで子どもたちが自宅で過ごすことになる。しかも夏休みの宿題というものが存在しない (小学生の場合はそもそも宿題という概念が存在しない) ので、保護者としては「大量にある宿題を早めに済ませておいたら」と言うこともできない。

わが家にとってこれはゆゆしき事態となる。今回のカナダ滞在では、妻が仕事の都合でこちらに長期間滞在することができないという事情があり、自分と息子の二人で生活をしている。自宅で仕事することは可能だが、息子が朝から晩まで自宅に居るとなると、まとまった仕事時間の確保が非常に難しくなる。日本のように「近所の公園に一人で遊びに行ってきたら」と言うこともできない。そもそも家でずっと過ごしていたら、息子が英語やカナダのことを学ぶせっかくの機会が失われてしまう。

小学生の夏休み問題はカナダの多くの家庭で生じているはずである。2021年時点のデータによると、20歳から49歳までの父親のうち92%、母親のうち77%が就労している。なので、多くの家庭では日中に保護者が居ない状況が生まれていると推測できる。保護者のうち誰かが子どもと過ごすことができるとしても、やはり気になるのは夏休みをどう過ごすかである。せっかくだから、体を動かしたり何かを学んだり、普段できないことをやってほしいと願ってしまう。

この問題を解決するために、カナダの保護者の一部はサマーキャンプに子どもを送り出す。地元自治体、スポーツクラブ、YMCA、大学などさまざまな運営主体がさまざまなプログラムを提供している。プログラムの内容は多岐にわたっていて、スポーツであれば水泳、陸上、サッカー、体操、クライミング、乗馬など、芸術であれば絵画や工作など、学習プログラムであればプログラミングやSTEAM (science, technology, engineering and mathematics) などがある。典型的なプログラムの場合、保護者は9時頃にキャンプ会場まで子どもを送っていき、夕方4時から5時ぐらいに子どもをピックアップする。キャンプという名前だが、一部を除いて宿泊は伴わない。プログラムの多く

は月曜日から金曜日までの5日間で設定されている。

息子はウェスタンオンタリオ大学が主催するサマーキャンプに参加することになった。プールで遊ぶプログラムに4日間、そして陸上プログラムに5日間である。付き添ってくれるのはウェスタンオンタリオ大学の学生たちである。小学校と違って活動内容の説明などが難しかったらしく行きたがらない日もあったが、それも含めているいろいろな経験をしてくれたのではと思う。さらに息子は英語の補習プログラムにも3週間ほど参加しており、そちらも楽しかったようである。

サマーキャンプは自分の時間の確保にもありがたかったが、金銭的にはなかなかの出費である。自治体が提供するキャンプを除いて多くのプログラムは有料であり、保護者にとってその負担はかなり大きい。自分たちの場合は今回が初めて最後のチャンスということもあり思い切って参加することにしたが、毎年の参加、しかも複数子どもたちを参加させるとなれば迷うことになるだろう。日本の習い事や塾などと同様に、カナダでも保護者の経済状態によって子どもの教育機会に差が生まれているのではと思う。

サマーキャンプや学期中の送り迎えの際には、男性保護者の姿をよく目にする。午後4時頃といった比較的早めの時間帯に迎えが必要な場合、保護者全員が働いていれば、都合のつく誰かが迎えに行くことになるはずである。日本であれば女性保護者を目にするこのほうが多いが、ロンドンでは場合によっては男性保護者のほうが多いくらいである。職場が近く、時間的に柔軟な就業形態を持つ男性が多いのだろうか。

送り迎えのときと同じく、男女比率が拮抗しているのがカナダの政治である。カナダ連邦議会の女性議員比率は2021年時点で約30%である。アフリカ諸国や北欧諸国では女性議員比率が50%近くに達していることを踏まえると決して高い数値とは言えないが、日本の約10%（衆議院の場合）と比べると議会内の女性のプレゼンスはかなり大きい。カナダでより注目すべきは、大臣を務める女性比率が50%に達している

ことである（2021年時点）。2015年から連邦政府を率いるトルドー首相は内閣における男女比率を等しくすることを明言しており、2023年の内閣改造でも男性大臣と女性大臣はそれぞれ20名と19名となった（39名には3名の性的少数者が含まれる）。内閣において首相に次ぐ2番目の地位の副首相および財務大臣を務める女性であるフリーランド氏である。トルドー首相とともに、フリーランド大臣の姿は新聞紙上でよく目にする。内閣の一員であり下院リーダーを務めるグード氏は数カ月後に第2子の出産を控えている。グード氏は2018年に初めて入閣した際にも第1子を出産しており、在職中に産する初のケースとなった。

日本では政治家や大臣といえばダークスーツを着た中高年男性を思い浮かべてしまうが、そのような思い込みを覆される状況であらためて女性と政治の関わりについて考えを巡らせるのは新鮮である。政治学ではどのような条件が満たされれば女性議員や女性大臣が増えるのか、そして女性議員や女性大臣が増えることで政策形成や社会にどのような変化が生じるのかについての研究が盛んに行われている。そのなかに、ロールモデルとしての女性議員に関する研究がある。女性議員の存在や活躍を見た有権者の態度や行動が変容し、さらなる女性議員の増加につながるという知見が提示されている。この知見を踏まえれば、議会や内閣に占める女性の大きなプレゼンスはカナダの有権者に何らかの影響を及ぼしているはずであり、この変化がさらなる女性議員の増加につながるというサイクルが生まれるだろう。一部地域を除いて女性議員がなかなか増えない日本ではそのようなサイクルが生まれる日が来るのだろうか。じれったい気持ちになる。

まつばやし・てつや 大阪大学大学院国際公共政策研究科教授。著者に『何が投票率を高めるか』（有斐閣、2023年）。政治学専攻。